

『原三溪翁伝』第3篇第2章を読み進めました

8月の定例研究会では、『原三溪翁伝』の輪読を進めました。

◆輪読 1

発表者：大津佳子

範囲：pp.660～681

第3篇 性格と趣味

第2章 趣味

第5節 書道

第6節 史観と文学（文章）



第五節 書道、第六節 史観と文学（文章）を担当する。翁は、「書も絵も個性を発揮したものでなければだめだ。」と言い、徹頭徹尾個性を重んじ、他の真似をしなかった。また歴史好きの翁は、興味を持ったら探究せずにはいられない性格で、その歴史の知識は相当なもので、『三溪画集』の中の絵の説明文においても、歴史上の人物が描かれており、またその文章は的確で流れるようである。翁の博識についてはあまりにも奥が深く、担当の約20ページをどうまとめるか迷った末、本に書かれていることに沿って追っていくという方向で発表した。私の中では歴大な課題が残ったが、今後の学ぶ楽しみとしてすこしでも知識が増やせたらと思っている。『三溪画集』が見たくて、横浜市中央図書館にいった。ゆったりと楽しい時間を過ごしていたら、3時間たっていた。（大津）

◆輪読 2

発表者：山崎宣晴

範囲：pp.660～622

第3篇 性格と趣味

第2章 趣味

第2節 庭園



内苑に亭榭という東屋風の見晴らし台がある。三溪翁は何が目的でこれを造ったのか。池の上に懸けられた橋の雰囲気はまさに、理想郷として又、極楽浄土への懸橋として造られたと類推する。これに酷似したものが、岐阜県多治見市の臨濟宗永保寺にある。夢窓疎石が正和二年（1313）39歳の時、最初に創建した禅宗古刹で、之を無際橋（反橋）と言ひ、初めて造営した本格的な日本庭園である。

三溪翁は近代稀にみる作庭芸術家である事は間違いない。禅僧疎石を庭園の開祖とするなら、利休のわび茶の庭園技術の導入（数寄屋風・露地）の導入により更に発達し、超近代に於て三溪が造営した三溪園は、「自然主義風景式庭園」としての真にすばらしい「一言以蔽之」のものである。（山崎）